

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

ネパール人日本語学習者による日本語のリズム生成

大熊 伊宗

2018年3月

本研究は、ネパール人日本語学習者（以下 NPLS）のリズム生成の特徴を明らかにし、NPLS に対する発音学習支援、リズム習得研究に示唆を与えるものである。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

第一章 序論

第一章では、本研究の問題意識、意義、目的、本論文の構成を記した。

まず、問題意識として以下の 2 点を挙げた。第一に、ネパール語の韻律特徴に関する先行研究が不足しているため、NPLS の日本語の発音の特徴の分析、NPLS の発音学習支援の重要性の検討を十分に行うことが出来ないという点である。第二に、リズム教育・リズム習得研究において、リズムという観点から日本語学習者（以下 NNS）の発音の特徴を解明するための基礎研究が不足しているという点である。特に、先行研究と同様の指標を用い、多様な言語リズムの比較検討を行うことが必要である。また、2 点の問題意識に至った経緯として、近年 NPLS が増加しているという背景、筆者自身の NPLS との接触場面における経験について記述した。

続けて、本研究の意義として以下の 2 点を挙げた。第一に、学習者の母語背景を踏まえた音声教育という観点から、本研究の成果を NPLS の発音学習支援に繋げることが出来るという点である。第二に、リズム習得研究という観点から、先行研究の存在しない母語話者を対象とし、第一言語、第二言語、目標言語のリズムを比較することで、理論構築への貢献が期待できるという点である。

以上を踏まえ、本研究の目的を、「NPLS のリズム生成の特徴を、ネパール語、NPLS による日本語、日本語母語話者（以下 NS）による日本語、3 種のリズムの関係性という観点から解明すること」と明記した。これを明らかにした上で、先行研究との比較から、NNS のリズム習得について考察した。リサーチクエスチョン（以下 RQ）は以下の 3 つである。

RQ1：ネパール語のリズムは、どのような特徴を持つのか。

RQ2：NPLS の生成する日本語のリズムは、どのような特徴を持つのか。

RQ3：NPLS の生成したネパール語のリズム、日本語のリズム、NS の生成した日本語のリズムはどのような関係にあるのか。

最後に、上記の RQ を明らかにするために行った 2 つの生成調査（調査 I：ネパール語の生成調査、調査 II：日本語の生成調査）の概要と、本論文の構成を記した。

第二章 先行研究

第二章では、本研究に関連する先行研究を概観し、得られた成果をまとめたうえで、本研究の位置づけを記した。

まず、言語のリズムの定義、類型をまとめた上で、多くの言語のリズムが未解明であることを述べた。次に、モーラ拍リズムとされる日本語のリズムに焦点を当て、主に日本語教育の立場から行われた先行研究をまとめた。その結果、モーラ拍リズムの習得が NNS にとって困難な学習項目であるとされてきたこと、それが主に特殊拍の習得という観点から論じられてきたことがわかった。また、今後はリズムという観点からの、多様な言語リズムの比較検討が求められていることがわかった。続けて、リズムの計測方法について先行研究をまとめた。その結果、言語のリズム類型に用いられてきた PVI (Pairwise Variability Index) の計測方法が、リズム習得過程の記述、第一言語・第二言語・目標言語間の比較に使用可能であることがわかった。さらに、本研究の調査対象となる NPLS の母語・第一言語と考えられるネパール語に関する先行研究をまとめ、NPLS のリズム生成の特徴を予測した。

最後に、先行研究を踏まえ、本研究を「NPLS の発音学習支援を念頭に置いた、NPLS による日本語のリズム生成の実態を解明する基礎研究」、「理論構築への貢献を念頭に置いた、先行研究との比較に基づく考察を重視するリズム習得研究」と位置付けた。

第三章 ネパール語のリズム (調査 I : RQ1)

第三章では、調査 I の目的、内容、結果、考察、まとめを記した。

まず、調査 I の調査目的を、「PVI を用いた計測による場合、NPLS の生成したネパール語のリズムはどのような数値となるのかを明らかにすること」と明記した。

次に、調査協力者の選定基準、調査文の作成、調査の実施手順、データの分析方法、分析結果について述べた。分析の結果、ネパール語の nPVIv (Normalized Vocalic PVI) は 41.36、nPVIc (Normalized Intervocalic PVI) は 54.62 となった。他言語の数値と比較した結果、ネパール語の PVI は、音節拍リズムに近かった。

以上の結果とその要因について、調査文、音響分析データを検討の上考察し、RQ1 に答えた (本概要書では、第 5 章を参照されたい)。最後に、本章をまとめた。

第四章 NPLS の生成した日本語のリズム (調査Ⅱ : RQ2、RQ3)

第四章では、調査Ⅱの目的、内容、結果、考察、まとめを記した。

まず、調査Ⅱの目的2点を、「PVIを用いた計測による場合、NPLSの生成した日本語のリズムはどのような数値となるのかを明らかにすること」、「NPLSの生成した日本語のリズムは、NPLSの生成したネパール語のリズム、NSの生成した日本語のリズムと、それぞれどのような関係にあるのかを統計的に明らかにすること」と明記した。

次に、調査協力者の選定基準、調査文の作成、調査の実施手順、データの分析方法、分析結果について述べた。分析の結果、NPLSの生成した日本語のnPVI_vは54.37、nPVI_cは59.57となった。そして、nPVI_v、nPVI_cの両数値に基づく3種のリズム間の比較(MANOVA (Pillai's Trace))、nPVI_v、nPVI_cごとの3種のリズム間の比較(ANOVA)、各リズム間の比較(Tukey)の全てで、統計的有意差が確認された($p < .05$)。また、各リズム間の差は、全て大きかった(Cohen's d 、 $d > .08$)。つまり、ネパール語、NPLSの生成した日本語、NSの生成した日本語のリズムはそれぞれ異なるリズムであった。

以上の結果とその要因について、調査文、音響分析データを検討の上考察し、RQ2、3に答えた(本概要書では、第5章を参照されたい)。最後に、本章をまとめた。

第五章 結論

第五章では、RQの答え、総合的考察、日本語教育への示唆、今後の課題を記した。

まず、RQに対する答えをまとめた。それぞれ以下のとおりである。

RQ1 : ネパール語のリズムは、どのような特徴を持つのか。

他言語と比較すると、ネパール語のリズムは音節拍リズムに近いことがわかった。nPVI_v、nPVI_cともに、日本語よりも低い数値である。調査文、音響分析データを検討した結果、その要因が、音節構造の複雑さ(閉音節の割合の高さ)、強勢の程度、母音弱化の程度、子音連続という観点から説明できることがわかった。

RQ2 : NPLSの生成する日本語のリズムは、どのような特徴を持つのか。

NPLSの生成した日本語のnPVI_cは、韓国人日本語学習者(以下KS)(木下2010)とは異なる傾向があり(nPVI_cの数値:NPLS<NS、NS<KS)、母語であるネパール語の影響が示唆された。特に、日本語学習歴が短いほどnPVI_v、nPVI_cの数値が低くなり、ネパール語の数値に近づく傾向があった。一方nPVI_vで、NPLSとKSには共通する傾向が

見られ (nPVIv の数値 : NS < NPLS、NS < KS)、NPLS の場合は個人差が大きかったため、ネパール語の影響は示唆されなかった。さらに、音響分析データから発音の特徴を検討した結果、不自然な促音の挿入の少なさ、母音の無声化の起こりにくさ、子音の持続時間のばらつきの小ささ、不自然な母音の伸長の多さ、不自然なポーズの取り方、調査協力者ごとのリズムの取り方の差異が観察され、PVI の数値に影響していた。

RQ3 : NPLS の生成したネパール語のリズム、日本語のリズム、NS の生成した日本語のリズムはどのような関係にあるのか。

ネパール語、NPLS の生成した日本語、NS の生成した日本語のリズムはそれぞれ異なるリズムであった。そして、nPVIc の数値は、ネパール語 < NPLS の生成した日本語 < NS の生成した日本語の順であった。NPLS の生成した日本語のリズムが中間的な値となった点、子音の発音、RQ2 で挙げた発音の特徴から、ネパール語の影響が大きいと考えられる。次に、nPVIv の数値は、ネパール語 < NS の生成した日本語 < NPLS の生成した日本語の順であった。3 種のリズム間の関係性、RQ2 で挙げた発音の特徴から、ネパール語の影響よりも、学習者独自のリズム生成の影響が大きいと考えられる。

次に、A) NPLS のリズム生成の特徴、B) NNS のリズム習得について総合的に考察した結果、それぞれ以下が明らかになった。

A) NPLS の母語であるネパール語のリズムは、音節拍リズムに近く、日本語と比べると nPVIv、nPVIc の数値が低い。NPLS の日本語のリズム生成には、nPVIc の数値が NS に比べ低いという特徴があり、これはネパール語の影響であると考えられる。一方で、nPVIv の数値は、NS に比べ高いという特徴があるが、これはネパール語の影響として説明できず、学習者独自のリズム生成の特徴が大きく影響すると考えられる。特に、nPVIv の数値は個人差が大きく、NS の平均値を下回る例もあったことから、nPVIv には、日本語学習歴、リズムの取り方などの個人差が顕著に表れると考えられる。以上、nPVIc、nPVIv の数値を総合的に見ると、NPLS は、主に母音の長短でリズムを取っていると考えられる。最後に、調査文、音響分析データを検討した結果、NPLS のリズム生成には、調査文の音節構造、特殊拍、母音の無声化、学習者独自のリズム生成、個人要因が影響を与えることが明らかになった。

B1) NNS の生成する日本語のリズムには、母語・第一言語の影響がある。また、母語・第一言語の違いにより異なる習得過程を経る可能性がある。ただし、NNS の生成する日本語のリズムは、母語・第一言語のリズムとも、目標言語のリズムとも異なっており、リ

ズム生成の可変性が明らかになった。

B2) NNS の生成する日本語のリズムには、nPVI_v の数値が NS に比べ高いという共通点がある。NPLS の場合はネパール語の影響として説明できないため、nPVI_v の高さは、日本語のリズム生成における中間言語の特徴といえる可能性がある。

B3) NPLS の生成する日本語のリズムは個人差があり、日本語学習歴が影響する可能性がある。つまり、NNS は学習初期段階では母語・第一言語のリズムの影響を強く受け、学習が進むにつれ中間言語のリズムに近づいていく可能性がある。

続けて、NPLS に対する発音学習支援への示唆、リズム習得研究への示唆として、以下の3点を挙げた。

1) リズムの取り方に関して、母音の伸長、ポーズの取り方に注意する必要がある。特殊拍については、不自然な促音の挿入の少なさを念頭に置き、短音・長音の弁別に注意する必要がある。さらに、母音の無声化を指導する必要がある。

2) 言語リズムの測定には、先行研究、多様な言語リズムとの比較検討が可能な指標を用いることが重要である。これにより、母語・第一言語の影響の大きさ、NNS のリズム生成の特徴を考察することができる。

3) 調査文、音響分析データを検討し、音節構造の特徴、特殊拍、学習者独自のリズム生成の特徴、個人要因を示すことが重要である。これにより、母語・第一言語の影響だけでは説明できない NNS のリズム生成の特徴、個人差を考察することができる。

最後に今後の課題として、以下の3点を挙げた。

1) 本研究でばらつきの大きかった NPLS の生成する日本語の nPVI_v に関して、日本語レベル別の調査を行い、ネパール語の影響の大きさを再検討すること。

2) PVI を用いた同様の方法で他言語母語話者を対象とした調査を継続し、NNS の nPVI_v の数値の高さが中間言語の特徴であるのかを検証すること。

3) 特殊拍・リズム型の影響に焦点を当てた調査文を作成し調査を行い、特殊拍・リズム型の影響と学習者独自のリズム生成の影響を比較検討すること。

主な参考文献

- 木下直子 (2010) 『韓国人日本語学習者の日本語リズム習得研究』早稲田大学博士論文
- Grabe, E., Low, E. (2002) Durational Variability in Speech and the Rhythm Class Hypothesis. *Papers in Laboratory Phonology*7, 515-546.